

体恤と実践

1975年2月2日（日）前本部教会

我々は信仰の道を歩んでいます。信仰の道とは、我々自身が体験し、悟った道でなかったならば、一生を、あるいは人生をかけては行けない道であるとみるのです。

信仰者は体恤を通してのみ強くなる

誰かの話を聞き、その話の通りに従うという人は、必ずその話を中心として、体験を通して、実際にその通りか否かを経験したく思うのです。これが我々の立場です。信仰の道を歩む時も、み言を聞き、あるいは聖典を学んだとしても、学んだ通りに現れるかということ、我々はいつも体験したく思うのです。さらには信仰の対象は見えざる神、ハナムデであります。神を中心として信仰していますので、その主体たる信仰自体を考えれば考えるほど、これが確実に現実的に我々が体で感じて、体験する内容によって現れるかということは難しいのです。我々が五感を通して感じるように、平面的な立場で、実感的には感じられないのです。それはどこまでも霊的と同時に、無形的な主体を対象としている限り、その主体と自分自体が、体恤的体験段階までいくということは、やさしいことではありません。

体恤は、我々の信仰生活に絶対必要なことです。その体恤を通して神の神格を知ることができ、同時に神が自分と共に、どのような内的心情の因縁を持っているかということを感じることができるのです。この体恤の道を通してのみ、我々はそれを感じます。信仰生活を通して、より理想的な新しい希望を抱けるということも、この体恤の過程を経ない限り現れないとみるのです。

過去のキリスト教の歴史を見ても、400年のローマ迫害時代において、ライオンのえじきになっても信仰の道をひるまず歩んだということは、漠然とした立場でそうなったのではないのです。必ずそんな立場を越えていく体恤的な内容、彼らにとっては否定しようにも否定できない内容があったからです。環境がどんなに難しくても、現実的に彼らを殉教の道へと越えさせて行っただけです。

聖書を見れば、ペテロやパウロのような人々が、難しい問題にぶつかるごとに必ず天のまえに祈禱し、その祈禱を通して天は指示したのです。そんな内的信仰の祈禱が必ずあったということを、聖書を読んで知るのです。

そんな生活の基盤、伝統があればあるほど、その人間は強い人間なのです。このような体恤を通して人間は、誰もできない歴史的なこともできるのです。世の中の人がこれを

理解できず、どんなに反対したとしても、自身が内的に体恤し、またこれを経験したものが実践世界において、環境に適用されるという事実を多く感じれば感じるほど、その人は強められていくのです。

世の人は信じられなくても、自身は出発と同時にその事実を信じ、その結果が現れなくても、結果以後のことまでも予想して、強く雄々しく環境を開拓していけるのです。これは必ず体恤を通してなければ、不可能だとみるのです。ですから我々信仰者に必ず必要なことが、体恤なのです。

体恤の道は心のゼロ点基準を合わせること

我々が信仰の主体たる神を思慕し、欣慕するとしても、それは模糊としているのです。では神をどこから捜し求められるのでしょうか？ これが問題です。それはどこから？

主体は確実にありますが、自分が確実に感じられないというのです。我々がこの五感で確かめられないのです。これをどこから探ってこられるかというとき、その主体から探ることはできません。神様からは探れないというのです。それはどこまでも自分から探さねばなりません。そうになっているのです。

それでは私自身を中心としてみると、自分という存在は、体と心があります。体と心がありますが、体を中心としてこれを探りだせません。結局は心を中心として探りださなければなりません。

ところで墮落した我々人間をみると、この心自体が、千人なら千人、万人なら万人が全部同じでしょうか？ そのパターンは同じでも、心自体は性質に従って違うのです。円形を描いて、水平線を引いて、十字を描くことによって360度の円形を描くのです。

一本の水平線を描き、一本の垂直線を描くここにおいて、90度の角度の分別の度数が定まるように、必ず我々の心が円形のようなものとすれば、これをどのようにするかが問題です。この水平線がその人間により、その形態が各々違うのです。我々の顔が違うように、皆さんの本質も全て違うのです。我々の趣味が違い、感情が違うようにこの度数を描くところの、水平線と垂直線が違うのです。人により皆違います。この度数を合わせなければならぬという結論が出るでしょう。

では、どうすればいいでしょう？ ゼロ点を探さねばなりません。ゼロ点がどこか？ これがあるのです、皆さん自体に。ゼロ点があり、これを水平線とするならば、この水平線を中心として、ある垂直線が引かれるのです。天が主体ならば、その主体の前に、自分が対象的立場にたつのです。主体たる神は、人間に対象として感応する本質を必ず与えられていますので、平面的な心の本質の基準の前に、垂直に向かうこのような方向がなければなりません。これが必ずあるというのです。

水平線はこれは平面としてありますが、これが垂直に立てば、この垂直線の基準が全て違うのです。それではこのゼロ点基準をどのように合わせるかというのです。こっちに行けば必ず反対になりますので、このゼロ点に合わせなければなりません。発電所にいってみれば、メーターが沢山あるでしょう。メーター器にはゼロ点のような基準があって、これを中心に全て調整して、バランスをとるように、このようなゼロ点基準がなければなりません。

それではゼロ点基準とはどんな立場でしょうか？ あってもないような、なくともあるような立場。禅宗で、参禅をする人々が無我の境地という言葉を使いますが、そんな境地なのですね。そんなある霊的基準に接近する自分にならなければなりません。このような基準になれば、必ず自分の水平線の基準が反応する、そんな何かがあるのです。

天の心の門と自分の心の門を合わせる生活

心も見ればどうでしょうか、心の門があるのです。心門というでしょう？ その門が、いつも一面だけ開いているのではなくて、心も回っていますので、その門も移動する、とこのようにみるのです。ですからこの門を通らなければ、神があるなら神を中心として、プラスならプラスを中心として、マイナスの立場で関係を結べないのです。この角度、方向が違っていたら、これは適用できないのです。人間にはこんな心の門があるのです

皆さんが祈禱してみれば分かるでしょう。祈禱してみると、時間によって感じが違うのです。深夜の1時に祈禱するのと、3時に祈禱するのと違います。これは皆さんが体験してみれば分かります。神秘的な深い境地に入って祈禱すれば、時間によって違うのです。感じが違うのです。朝に感じるのと、真昼に感じるのと、夕方に感じるのと、夜に感じるのと違うのです。

このように心の状態によって感じるその基準が、我々の肉体的感情が四季の季節の変化によって感じが違うように、心の世界もそうなのです。ですから祈禱する時も、ある時間に良くていいのです。良くていい時間、これが何かというと神との感応の角度が近いということです。良くていいということは、探してみれば門に出会っているのです。神の心の門と、人間の心の門がぴたりと合って、ある同じ基準で合っていたら、神の心情を体恤することのできる道が生まれる、そうみるのです。

皆さんがそうなるには、どうしなければならないでしょうか？ 心を中心として、心を磨かなければなりません。元来がこの基準のゼロ点にならなければならないのに、墮落してこれが180度になってしまったのです。この度数がゼロ点にならなければならないのに、ダメになったのです、勝手に。ですからこれを回して、正しく回してやらなければなりません。(図を描いて説明される)

ある人間はゼロ点がここにあるのに、ここに行ってしまったので、このように（時計回りに）回っていかねばなりません。こっちに行ったら千年行ってもダメです。これは後戻りしなければなりません。今日の宗教も同じなのです。宗教も目的に対して、終わりの日だ、終末だということもみな分かれてしまうのです。ところでこのように発展してゆく宗教はこう行くのですが、この場に止まって、こう行けばいいのですが、もしも反対にこうなれば、この宗教は終わりの日になればダーとなるのです。

ある人は祈祷の方向が違いますので、この場に行けば反対の道を行くという現象も生じるのです。神のみ旨を中心として興った宗教もありますが、サタンのみ旨を中心として興った宗教もあるのです。これが全部このように混ざっているのです、これを分けていくのがとても大変なのです。

このような結果と同じく、我々の心の世界も同じなのです。善なる心があると同時に、悪なる心もあります。皆さんの心が「あ！ 私は善だ」このように考えているでしょうが心自体も善ではないのです。墮落の結果、悪なる心の圏、悪なるサタン圏に感染した心をもっている人もあり、善なる圏内の心をもっている人もいます。千態万象の差が生まれるのです。

ですから最も重要なことが何かというと、このゼロ度をいかにして探し求めるか、心の門をどのように合わせるかという問題が、信仰生活において最も重要な問題ではないのかということです。皆さんが信仰の過程において、いつも注意しなければならないことは、心の門を開く時を知って、天の心の門とどのように合わせるかということです。これは皆さんがいつも準備しなければならないことです。

心の門を開き、天の門といかに一致させるかという問題が、信仰生活において大切なのです。

心の門が合えば暗示を受けるようになる

次第にこの相対的立場に立てば、今まで感じたことのなかった新しい感じ、そんな現象が起こるのです。それが何かは分からなくても、くるのです。かつては冬のような気分しか感じなかったのに、秋を感じるようになり、夏のような気分も感じ、春のような気分にもなるのです。なぜでしょうか？ この宇宙は回っているのです。心も回っています。ですから回って、春夏秋冬の変化を起こすのと同じく、心の世界も回って、それと同じ変化をする感度を感じるようになるのです。

一年を通してみれば四季、春夏秋冬がありますが、一年を縮めたのが一日ですから、一日にも春夏秋冬があるのです。朝は春にあたり、昼は夏にあたり、夕方は秋であり、夜は冬にあたります。このように春夏秋冬が、一日のうちに起きてくるのです。

我々の心もこれと同じことなのです。ですから心に感じるのが、いつも同じではないのです。季節に従って、自分が春だということを知っていれば、あるいは夏だ、ということを知っていればいいのですが、これが分からないのです。多くの体験を通して、あるいは多くの祈禱の生活を通して「あ！この時があの時だな」ということを、より分けることを知らなければなりません。

こんな境地に入ればどんな現象が起きるかというと、暗示という言葉があるでしょう？暗示！それがどんなことかというと、無心に道を歩いていて、塀の上に止まっていた鳥がパツと飛び立つ、その瞬間、心の門が別の方へと……。この事から暗に何かを教えてくれる、そんなことが起きるのです。実生活においても、そんなことが起こり始めるのです。暗示的条件が多くなるのです。ある人が偶然に語ったことから、パツと何かを悟る、そんな事実がだんだん多くなるのです。

夢示が、共鳴する圏内に入ったことを示す

この段階を過ぎると、夢示のようなことを体験するのです。夢の中で起きる事で、夢でも深い眠りの中の夢ではないのです。夢うつつの中で……。パウロのような人も夢うつつの中で三層の体験をしました。夢のような祈禱をし、夢ではないような祈禱をし、夢の中にいるのか事実なのか……。横で語っていることを全て聞いていて、3分の2はキャッチして、夢うつつの中でこのような声というか、五感で感じるものがあるのです。このような事を無視しないでください。夢示のような事は100%的中するのです。

夢うつつの中で誰と話しているのか、ある人間なら人間、物なら物が、その夢の中で係わりをもったなら、これが事実の中で、実体として連結されるのです。私が夢の中で誰かと歌をうたっていて、その歌がまさに夢の中の歌ではなくて、横で誰かがうたっていた歌だった、そんな事が起こるのです。これはどういう事かというと、霊的次元において、心の状態が共鳴する圏内に入ったということです。音叉というものがあるでしょう、音叉。このような事を極めて尊く思わなくてはなりません。

体恤と実践は生命の因縁をもってくる

神様がおられるなら、その神様はどこに現れるのですか？ 空中に現れるのではなく、心を通して現れるのです。ですから自分の心と、自分が二つの別の存在であるということです。皆さんはそんなことを感じないでしょうか？ なぜそうなのでしょう。心があくまで存在性を確立できないからか、肉体に引っ張られる人間になってしまったからなのか？

心の存在性を確立していったら、また他の一つの主体たる人格的な次元の立場が形成されていったら、これは必ず別になるのです。

次元が高まれば次第に……。祈禱してみれば、心とお話するのですよ、心と。そうなれば心の内で語ることを、自分が聞くのです。そんな境地に発展していくのです。最初の段階では暗示のようなことが、皆さんの生活で起こるのです。

それ故、信仰者はそんな沢山の材料を蒐集しなければなりません。接する人があれば、無視してはいけません。彼が自分に何を得させるか？ いつも求める者の心情でいなければなりません。結局それ自体は何か？ 自分がいつも主体となっているか、対象となっているのです。確定的主体であり、確定的対象の立場にあるという事実をいうのです。これがいつも自分が探し求めているということです。

ですから主体となるものの存在が現れたなら、いっぺんに分かるのです。あるいは対象的存在が現れたなら、いっぺんに分かるのです。自分が誰か伝道する人間があったなら、いっぺんに分かるのです。訳もなく心がいくのです。これを心波というでしょう？ 心の波長があるというのです。

皆さんをみれば、肉屋は肉屋の匂いがするでしょう？ 生地屋は布地の匂いがします。皆さんの体から匂いがするように、心の匂いがするのです。その心の匂いを嗅ぐのです。我々の体には触覚というものがあって、全てに触れています。それで目に見えぬ電波のようなものを発射して相対的対象を求めるという生活……。心はこっちへと考えても拒絶されるのです。磁石の方向性と同じく、プラスとマイナス……。このように行っても「アッ！」といってそんな作用を悟るという段階へと入るのです。こんなことを皆さんは考えなくてはなりません。

ですから信仰する人の態度は全て自分と共に関係していると考えなくてはなりません。なぜこのようになるのですか？ 墮落が何かといえ、全ての関係を失ってしまったことです。自然に対する関係、本然の人間に対する関係、本然の神に対する関係、全部を切断してしまったのです。切断した関係の世界を、我々が再び接続させるためには、いつも自分自身がそれと接続させる作用をしなければなりません。そんな作用をすることによってのみ関係が開拓されるのです。接続しようという態度をもたない限り、この環境は開拓できないのです。これはとても理論的でしょう。

皆さんは何かを求める心がなければなりません。朝に祈禱してみれば「あ、今日は良い日だ」ということを知るのです。「良い日だから、こんな良いことが起こるぞ」とこのように分かるのです。このような生活態度が皆さんの信仰生活にならなければなりません。それ故、体恤と実践ということは、命の因縁を持っているということを、我々は知るというのです。夢うつつの中にこんな事が起こるのです。

啓示段階が過ぎると黙示段階がくる

この段階が高まれば、どんな事が起きるでしょうか？ その次には啓示というか、指示というか、そんな事が起こるのです。啓示ということ进行分析してみなくてはなりません。指示ということは直接教えてくれることですが、啓示は違うのです。ですから問題が起こるのです。これは必ず解決しなければなりません。何かを教える時も、声でするかも知れませんが、幻想でも見せてくれるのです。春のうららかな日、鹿が小川のほとりで水をのんでいる。仰ぎ見れば遠い山々が・・・こんな幻想は幸福らしい願望を象徴しているのです。こんな幻想が生じるのです。

このような事は偶然ではないのです。自分の心の焔を啓発するための、天の役事なのです。なぜでしょうか？ 我々の心の焔というものは、ガラス板のように平らではないということです。でこぼこしているのです。形は水平のようでも、それ自体はでこぼこしているのです。そこに天の感度が反射してくれば、光の屈折と同じく、入ってくる方向と反対の方向に反射してしまうのです。ですから全部違ってくるのです。みんな分かれてしまうので、こんなみ業をしなければならぬのです。部分部分を啓発するので、こんな役事をせざるを得ないのです。

啓示の段階を過ぎると、黙示の段階です。皆さん、黙示録があるでしょう？ 一日霊界に行って体験するというか、あの世の世界がどうだか……。そんな世界まで連結されているのです。神に対する生活的な感情圏まで到達できるのです。皆さんがこのような体恤的信仰を持たなかったなら、偉大な天のみ旨の結果世界を我々の生活の場、生活の舞台に適用できないのです。ですから体験を持たない信仰者は信じられないのです。このように見るのです。体恤的な信仰がどれほど尊いか、皆さんが分かって、そのように啓発しなければなりません。

霊的役事の過程を通して肉身を順化せよ

祈祷する中で、役事ということがあります。霊的な力が電気作用のように入ってくるのです。皆さんが体験してみれば分かるでしょうが、高圧に触れたような力が入ってくるのです。我々の意識よりも強い力が入ってくるので、これは他の世界の意識なのです。超自然的、超人的な感情が入ってくれば、我々の心、この肉身というものは墮落性をもっていますので、必ず本然の心情、本然の神の神性とは反発するのです。

ですから墮落した人間に、ある神の性稟が強力に入っても、自然的に順化する立場に立てないのです。これが入ってくる時はプラス、マイナスのように、音波も強弱で伝播されるように、必ずその力も一度にさっと入ってくるのではなく、強く入ってきたり、弱く入っ

たりして開拓されてくるのです。ですからここに振動が起こり、自分の意識が失われ、霊的力が強力に作用する現象が起こるのです。これが役事として現れるのです。

こんな役事がしきりに起こるとどうなるかというと、この肉体、肉性というものが、墮落性自体が順化していった、自然に100%受け入れるようになるのです。そんな現象ではなく、役事以上の場に入って、天の教えることがそのまま入るのです。このような現象の過程を経ていった、順化する立場までいかなければなりません。暗示、夢示、啓示、あるいは指示というか、こんな過程を経なければなりません。

このような体恤的信仰を、必ずもたなければなりません。心から感じることを、体恤したことをもって実験を通して、体験の場に入ってくれば、その人は強くなるのです。誰の話を聞かなかったとしてもです。体恤と実践、これが我々の信仰生活に極めて必要なことであることを皆さんは知らなければなりません。

人間は知的人間と霊的人間に分けられる

それではこんな境地に入るには、どのようにしなければならないのでしょうか？ だいたい人間を見ると二種類があります。知性によって真理として何かを探究して、理知に合えば認定し、理知に合わなければ否定するタイプの人間と、また一方はこのような理知よりも感によって把握する人間です。これを統一教会用語でいえば、霊的な人間と知的な人間です。霊的な人間は内的な面から感じていった、外的に適用しようという人間であり、知的な人間は外的な面から感じていった、内的に適用しようという人間です。一方は出ていくのであり、他は入ってくるのです。

知性的人間はだいたい祈禱を嫌うのです。「あ、祈禱、祈禱がなんで必要ですか？ 天のお父様、天のお父様という言葉は何でいう？」実感がありませんよ。信じられず、迷信のようであり、自分自身で否定しているような感じがするのです。これが知性的タイプで理論を好み、何かを求めようという人間。そんな人間があると同時に内面から「神様！」という言葉が、とても好ましい人間がいます。説明するまえに、まず好いというのです。「アボジ」といえばごはんを食べなくても良いというのです。こんな人間がいるのです。これは感度が違うのです。だいたい霊的運動において、革命的運動をする人間はどんな人間か？ 知性的人間はダメなのです。私はそう見ます。信仰世界において偉大なことを成す人間は、知性的人間ではないのです。無識で愚鈍な人間です。こんな人間は霊的人間です。感じる通りにやってみるというのです。神がやれというのでやってみるのです。やるからこれが実践する環境になる、そんなことが起こるのです。このようにして偉大な人間も登場するのです。

パウロのような人は知性的人間なのです。ところが街道で、天の霊的雷に打たれて、回心したのです。ですから外的に探究するよりも、内的に、爆発的に感じる道がありますので、全部を否定して、これを尊重視するのです。ここに新しいキリスト教の革命の旗手になったのです。

理性的に計算する人間は、宗教的心霊世界に偉大なる指導的役割をなすことができないと見るのです。

自分のタイプを知って不足な面を強くする

自分がどんなタイプかを知らなければなりません。霊的に感じる人間は、霊的には大きいのですが、真理面では細っているのです。始めは太いのですが、終いが細くては、これはずっと同じではないので、永遠には行けないのです。ある時には、必ず転げ落ちるのです。また真理面は大きいのですが、霊的な面がこのように小さかったら、これが永遠には行けないのです。これを調整する生活をしなければなりません。

祈祷と真理、霊的心霊と真理で礼拝せよ、という言葉があります。これは何かというと平行して行って和する場に入れ。人間は霊界と肉界を調整しなければなりません。霊的世界の中央に立ち、真理世界の中央に立って、中心的立場で左右を調整できる人間にならなければなりません。

霊的にのみ強いと、外的な面が欠如して(板書されながら)このように曲がってしまうのです。力の強い人間に引っ張られるのと同じです。真理面が強ければ、これが合わさって行くのに、右側に行ってしまうのです。こういう問題が起こります。これを調整しなければなりません。

それで先生は霊的な体験があったとしても、決して言わないのです。体験があるのかないのか分かりません。これをどうしますか？ 真理で調整しなければなりません。中庸の道を行って、いつも天の摂理観に方向を一致させることによって、ここに霊界の発展をなし、地上世界の、真理世界の発展をなすことができるとみるのです。

霊的世界がどのように動いて、真理とどのように関係を結んでるか、その事実を生活化しなければなりません。心霊と真理が必ず調和しなければなりません。なぜなら、人間自体がそうになっているからです。

我々はどこから幸福感を感じていますか？ 真理面から感じる幸福は方向的です。なぜでしょうか？ 霊と肉、心霊と真理をおいてみれば、どちらが主体か？ 心霊が主体なのです。真理は相対的です。相対的であるということは、方向的です。これは変わるのですが、心霊は変わらないのです。中心的ですから四方性を持っておりますので、変わることはないのです。ずっと続くのです。中心は二つありません。分かりますか？

真理は相対的立場であり、心霊は主体的立場です。主体とは中心をいうのですから、中心は二つあってはならず、一つです。中心とは、四方に対する立場ですから、その主体的中心の立場の心霊面を通した喜びというものは、永遠と連結しているのです。ですから霊的な体験を通して感じたものは、一生失われることがないのです。これは論理的な、当然の結論であります。

自分はどちらの人間か。知識を中心として、真理を探究する人間は、実践問題に入ってどうしなければならないか？ これば必ず補強しなければなりません。補強するためには必ず祈祷生活を始めなければならないのです。また祈祷だけして、心霊面だけ重視する人はどうしなければならないか？ 必ず真理に対して探究しなければなりません。このように両面を補強しなければならないことを、皆さんは忘れてはなりません。

それでは知恵ぶかい人とはどんな人か？ これを自分一人で調節するのは難しい。ですから親友をよく選択しなさいというのです。自分が心霊的な、真理的人間と一つにならなければなりません。このように二人で「やあ！ 私の心はこうだが、あなたの心はどうか？」このように囁くのです。型が違うでしょう。一方は内形的で、一方は外形的なこの二人が「私はこう？ あなたはこう？」このように互いに議論して互いに協助して完全に一つになったなら、信仰世界において互いに飛躍的な発展をすることでしょう。それで親友が必要なのですね。

統一教会を信じる人はこんな経験を沢山しているでしょう。何がどうのこうのという話を聞いて、心霊に打撃をうけて落ちこむのです。これは自分一人で、祈祷で解決しようとしても難しいのです。ですから自分と相対的な、真理的外的な人を中心として親友になっていけば「やあ、君はこうせい」また真理型の人間は、霊的な型の親友がいれば「やあ、私が祈祷してみるから」このようにすればたやすく解決するのです。

ですから信仰者には必ず親友が必要なのです。信仰者には必ず親友が必要だということを、知らなければなりません。

自分と相対的な型を持つ人間を親友として

皆さんが円満な人格をもつには、春夏秋冬、四季の形態の心の畑、心田を開発するには自分と相対的な型の人間を、自分の親友として歓迎する、資格者にならなければなりません。「アイグー！ あの人間は見るのもいやだ」こうではいけません。嫌いな人間が自分に最も近いことを知らねばなりません。嫌いな人間を好きになるということが、悪なる人間が、善となる近道なのです。何の話か分かりますか？

統一教会に入ってみれば、必ず嫌いな人間がいるのです。必ずいなくてはならないのです。その嫌いな人間が、自分にとっては怨讐ではないのです。自分と最も近くにいるの

です。真の道を開拓するにおいて、その人間が最も近くにいる親友となることもあり、近い怨讐となることもあるのです。

この観点から見れば、イエスが十字架につかれて、ローマ兵士に対して祈禱したのもこのことなのですね。ローマ兵は本来、最も近い立場におりますが、最も遠い立場に立っていたのです。しかしながらその人間を遠い怨讐として扱うのではなく、近い立場に立っていたのです。この怨讐を包括してって、一番の親友にしようという心があったから、あの祈禱をすることができたのです。ですから「敵を許したまえ」という言葉もここからでてきたのです。

今日のこの死亡の世界は、怨讐が支配する世界ですから、否定しなければならない世界です。否定しなければならない世の中において、肯定的な自分の立場を立てれば、これは永遠にこの悪なる世界を、否定することができないことになります。しかしながらそれ自体を否定するために、否定的な態度をもってゆくことによって、自体を否定して越えていく自然的環境を迎えるようになるのです。話は難しいですか、何の話か……。

知的な人間は祈禱が必要と同時に、何が必要でしょうか？ 心霊的な人間は知的な面の補強が必要と同時に、何が必要でしょうか？ 親友が必要であります。一人でやるのは相当に難しいのです。皆さんが他人の証しを聞き、経験を聞くことは信仰生活にとっても助けになるのです。「あ！ その通りだ」となるのです。心からの信仰生活をしたいというなら、統一教会の幹部たちの証しを聞きたいと思わなければなりません。協会長はこうだった、誰はこう、誰はこうで……全て違うのです。自分が相対して、消化できる立場に立ったなら、度数が広がってくるのです、度数が。(板書したものを示しながら)この中央線でなければこれは長く、こっちは短く、全て違うのです。

自分の性格に欠けている面を補うには、このように証しを聞き、これを自分のこととして吸収しなさいというのです。補強するのです。ですから多くの人の体験談を聞け！ 聞いて人の言うことを批判するなというのです。批判することは、サタン側になるのか、天の側になるのか、二つに一つを決定することを意味しています。

ですから批判することは、自分が発展するにおいて癌だというのです、癌。サタン側にいた奴が神側に行くことはできず、神の側にいた人がサタン側に行くことはできません。直行は絶対にできません。ジグザグに行くのです。

先祖も善なる先祖ばかりではなく、悪なる先祖も全て連関されているのです。善なる先祖の素質を多く受けている部分もあれば、悪なる先祖の素質を受けている場合もあるのです。批判していたら大変です。ですから判断するなということも、このような理からいうことです。

心霊的な面に自分の素質が合っている人は、霊的なことに対して気になるでしょう。先生のような人間は本来、生まれつきこのように生まれているのです。神についてお話す

ればとても気になるのです。めしを食わずに24時間やっても、やるほどに面白味がでてくるのです。これを一方的にやるのではなく、真理面で補強しなければならないのです。両面が必要です。自分の素質、どちらのタイプか、各自が分かっているでしょう。

その反対的な面を啓発するための、努力が必要です。あるいは真理を探究し、あるいは心霊面で体恤するということです。そこに何が必要であるかということ、祈禱と探究です。心霊的な人は霊的に感じたことを、真理で消化する基盤を築かなければならず、真理的面の知性的な人は、その知性的な面に霊的な、心霊的な面を補強する体恤的な基盤を築かなければなりません。そこに必ず自分が落ちることのない、永遠に発展することのできる基盤ができるのです。

自分一人では骨が折れるので、必ず自分と相対的な素質をもつ人を親友として、師として指導を受けることが最も正しいことです。

さてこのようなことを感じて「あ！ いま、分かった」という時は、その分かったというところに止まらないでください。実践しなさいということです。自分がやってみなければなりません。学校でもそうでしょう？ 実験をするということです。専門家は何で専門家ですか？ 同じようなことを沢山やった人間なのです。技術者とは、同じことを沢山やった人間です。ですから多くの実験をやってみなくてはなりません。

体恤した事実は相対性をもって生活圏内に

皆さん、霊的な、精神的な世界がどれほどの統一圏か分かりません。「私が誰かに会いたい」と24時間待てば、その人が来るのです。それは実現するのです。集中すれば現れるのです。これは電波が、ある方向に送られるのと同じなのです。その人は受信機のような心の本質がありますので、ひどく気になって行きたい・・・とこうなるのです。我知らずその心が強いと、どんな現象が起きるかということ、自分が学校へ行こうとしたのに、その方向をたどってくれば教会に来ているのです。自分の意識的基準を越えて行動する、そんな結果も必ず体験するのです。統一教会員もしきりに反対され、迫害される時に、そのおばさんたちが、ザルを下げて市場に行うとしたのに、統一教会に来るのです。これは普通の事です。何も珍しい事ではありません。ですから狂っているの、何かの電気仕掛けをしたのといろいろいって・・・。(笑い) こんな事が起こるのです。

実際の生活に影響を及ぼすようになるのです。これはそうなるより他にないのです。神を中心として、心霊的なその道を通していけば不可能はないのです。ですから祈禱の努力がどれほど偉大なものであるか、皆さんは知るでしょう。

皆さんが体恤した全ての事実を、実践の場で適用するとき、これをいかに相対性を得て各々の生活圏内に接続させるか、現象させるかということです。そうする人間は偉大

な信仰者です。漠然とした信仰者ではありません。その人は神を代身して時代的使命をなす責任者となるのです。分かりますか？「ハーイ」

体恤するためには何をしなければなりませんか？ まずは祈祷、精神集中です。できればゼロ点の場に下りて行くか、でなければ（板書されたものを指して）この場に行くかしなければなりません。

それでは最も早い道はどれか？ このゼロ点の場に行くには、ここに下りてくるのが最も早いのです。ですから心が何ですか？ 参禅する人には「心とは何ぞや」という問題をおいているのです。心が何であるかという問題は簡単です。心とは何ぞや？ 神が永遠の理想的善の主体であるならば、その主体的存在の前に、相対的本質として、いつも変わらざる相対基準をなすことができるものが、心に中心である。このように考えます。これは統一教会では「生心」の起源だとみるのです。この相対基準のみしっかり合わせれば、超然たる力が現れるのです。皆さんが神秘的な祈祷の中に入っていっていったなら・・・。

釈迦のような人もこんな境地に入って、こんなことを言ったのです。修行して、精神統一して、心霊なる霊的世界に入って、体験する中で、完全に神の主体の前に相対の立場に入っていくので「天上天下唯我独尊」という言葉も可能なのです。自分が世の中をぐっと掴めば、世の中が手の中に溶けてしまう、そんな心になるのです。こんな境地に入ってみれば奇跡は自動的です。癒しなども自然に信仰生活の付属物としてついてくるのです。この心の畑を啓発して、方向の基準を開拓するためには、必ず主体たる神を発見しなければなりません。ところで主体たる神は、漠然としていますから、神に連結するにはどうするのか？ 精神を集中して行って、自分の心から出発する道の外はないのです。我が心から、心を明らかにしてみれば、必ず方向が分かるのです。そうじゃありませんか？ 磁石のような話です。プラスがあればマイナスは自然に・・・誰が引っ張って行くの？

自然について行くのです。そんな何かがあるのです。皆さんもこれを感じるでしょう。自分が東側に向かって祈祷すれば、神秘的境地に入ったなら、きっと方向が変わります。また北側に向かって祈祷すれば、いつこのようになったのか・・・こんな事が起こるのです。ですから心の門があるのです。

祈祷がとてもよくできる時があるでしょう？ 自分がどんなに水行して精神を注いでも「アイグー・・・」祈祷ができない時もあります。部屋によっても違います。部屋の位置によっても違います。そうならざるを得ないのです。一つを中心を前において、中心を中心として東西南北がありますから、その位置に従って違ってくるのです。また方向によっても違います。山に行っても祈祷が良くできる時があります。またサタンが集っている所があります。これが陰地です。陰地と陽地ということが、霊的にこうなっているのです。何度も体験してみればこのような事が全て分かります。

暗示、夢示、啓示、黙示が起こるということは、人間と天との関係を結ぶために、開拓的で発展的な現象として現れる不可避的要件であるために、これをおろそかにしないように、皆さんの生活に適用できるよう努力しなければなりません。

天との関係を結ぶ為に体恤的信仰を経て

Aという人とBという人が同じではありません。ですから多くの人の体験を参照しなければなりません。体恤的信仰をもてば、誰かが「信仰せよ、教会に行け」という必要がないのです。腹がへればごはんを食べるように、のどが渴けば水を飲むように、自然にそうなるのです。

先生は自然をととても好みます。なぜ自然が良いかというと、先生の信仰生活において、そんな神秘的体恤をする内容が多いからです。その気分はいつも新鮮で、なごりおいしいのです。ですから自分が昔、恵みを多く受けた自然を眺め、瞑想したそんな境地、夜なら夜空を眺めたそんな境地、四季折々その気分はみな違うのです。皆さんは複雑多端な生活をしていても、その生活圏内で自らの位置を忘れてはいけないのです。

それで先生は水沢里に行く時もあり、清平にもよく行きます。アメリカに行く前にも毎日のように清平に行ったのです。どうして行くのか？ 自然がとても生き生きとしているからです。霊的にプラスになっているのです。

このように体恤的な、本質の感度というか、感覚をいつも補強しなければならないのです。それは自分が分かっているのです。「あ、いま自分はこんな段階に入ってきた」ということが大体分かるのです。

話をしてもそうです。熱心に血と汗を流せば、きっとある面にかたよるのです。これを全て調整しなければなりません。ですから信仰の道はとても難しいのです。皆さんがこのような境地に入ってみれば、親友がいなくても一人で行くのです。祈禱してみれば分かるのです。祈禱すれば。

このような生活をすれば、人に対する時、ちょっと見れば、その人がA, B, Cのどの型であるかが分かるのです。先生はそのようなことが早いのです。そんな体恤があれば、霊人も無数でしょう。人間が沢山いるように、さまざま霊がいるのです。人間の中にもいろいろな奴がいるでしょう？ 霊たちもそうです。それで霊を鑑定するには自分自身の尺度、心のゼロ点を中心として、これが左側に行くのか、正しく行くのか分別できなくてはなりません。善なる神か、悪なる神か、そんな感覚を通して分析できるのです。ですから必ず体恤的信仰が必要だということを知らなければなりません。

体験があったら必ず現実と関係を結べ

皆さんが体恤といえ、何をしなければならいでしょうか？ 心の門を合わせ、心の畑を耕し、これを啓発しなければなりません。ここには霊的な人、真理的な人がいますがこれを啓発するためには、一人でやるよりも指導者に従うか、あるいは親友に従うかして補強して、お互いに一つになることによって、補いをすれば早く発展するのです。このような体験があったら、必ず現実と関係を結ばねばなりません。必ず実践の場がなければなりません。

自分が何かを感じたら、これは偶然ではなく「何かがある」とどこに的中しているかを探ってみなくてはなりません。必ず教えてくれるのです。夢示というか、幻想の中で起こった事が、現実的に的中していることを発見するのです。

そのような面で専門的体験をかさねてこそ…。聖書の預言書の内容に、世界の時がどんな時かということとを分別できるのです。神の摂理が、どんな時に行っているかを分別できるのです。このような内的な体恤信仰を通して、皆さんが実践の場で、生活環境において、善なる環境を維持していかなければなりません。これが信仰生活において極めて尊い生活であることを知って、努力するよう願います。

既存教会で10年かかることを1年でやる

統一教会員は少しばかり誠精をつくせば、既存教会で10年努力してやることを、統一教会では1年だけ努力すれば到達できると見るのです。道が違うのです。なぜ違うの？

私はこう見ます。数多くの宗教がありますが、こんな円形があるとすると、ある人はこのように回り…。この中心を中心として、これが方向がないというのです。上であれ下であれ方向がないのです。それで、神のみ旨がどうなっているか、知らなかったでしょう。勝手に回っていますから…。ですから祈禱しても中心がどこだか漠然としているのです。それで神が全てやる前には、体恤的信仰段階に入るのが難しいのです。

統一教会はそうではありません。目的観がはっきりしているのです。創造目的…。神のみ旨は何か？ 既存教会の牧師や、神学博士に「神のみ旨とは何ですか？」と問うてみれば「アイゴー！ それはやさしくて難しいことだ」とこのように答えるのです。（笑い）いかに牧師でも「神のみ旨が何ですか？」と問えば「さあて…」とこうなるのです。さあて、ではありません。統一教会では、神のみ旨といえ「創造理想を完成させること」さっとでるのです。創造目的完成だ！ 創造目的完成が何か？ 個体では個人完成であり、家庭では家庭完成であり、このように全体が現れるのです。これしっかり確立していること

です。主体観が確立しているのであり、対象観が確立しているのです。決定している方向に対しては、問題視する必要がないのです。

既存教会の信仰は、方向が模糊としているのが大きな問題です。「神のみ旨がどうなっているのか？」といえは「あ、世を火で審判するのだ」とこうです。これはどれほどあいまいですか？ こんな信仰を、どうして信ずるのか……。ほんとに……。(笑い)

方向がなければなりません。「天のアボジなら、真のアボジか？」といえは「はあて、アボジというからアボジよ」こうなのです。

統一教会ではどのようになっているでしょうか？ 方向と目的観が確実であることによって、方向がすでに制定されているのです。目的が確実で方向が正しいのです。今は方向が問題でしょう。世界がどんな目的をもっているか？ 人類がどんな目的をもっているか？ どんな道を行かなければなりませんか？ 民主主義であれ、共産主義であれ？

目的観が確立していないのです。民主主義も共産主義も方向が確定していないのです。ですから混乱するのです。勝手気ままにやっているのです。

しかし統一教会は目的が確定して、方向が確定していますから、これが動き出せばどこに行きますか？ 前進しようとするのです。その前進度は、昨日と今日では違うのです。努力すれば方向において、発展的結果をもたらしますので、必ず早いうちにその目的の場に到達でき、あるいは目的の価値に対する感応を、生活圏内において感じられるとみるのです。これが何の話かということ、既成教会では10年の間、誠精を尽くさなければ到達できないことを、統一教会では1年以内にも到達できるというのです。1年までもかかりません。大体に体験するのです。

統一教会員は誰が教えてくれるかという時、神が教えてくれるのではなく、先生が教えるのです。いま統一教会が真に神奇なことは、先生はこの肉体をもって生きているのですが、いまアメリカならアメリカ食口たちに、ドイツならドイツの食口たちに、霊的に全て教えるのです。皆さんもそうじゃないですか？ 夢示というか、夢の中で、あるいは祈祷の中で、先生に沢山会ったでしょう？ そんな体験がある人は手を挙げてみて。これは全てですよ、100%。これがない人は統一教会員ではありません。ですから統一教会が偉大だというのです。統一教会が強いのです。先生が命令すれば何でも可能だという、そんな事が起こるのです。なぜそうなるか？ 私だけ知っているのです。(笑い) そんな事が可能なのです。すでに体恤圏内に入っているのです。

これが過去には縦的な面で天との関係でしたから、どれほど難しいでしょうか？ 自分の位置を犠牲にして離れなければならなかったので、体恤するのが難しいのです。今日、統一教会では横的基準ができていますので、そのまま行けばいいのです。ですからやさしいのです。そういう境地に入ってきましたので、統一教会では早い時期に体験することができのです。

皆さんが神の心情をどのように知りますか？ 模糊としているでしょう？ 神の心情を求めて、入って感じてみれば結局、先生と近くなることだ、結論がこうなるのです。これが統一教会員の秘訣ですよ。

体恤したことを世界化せよ

祈禱してみると、統一教会を信じてみれば、結局は誰と近くなったかということ、神と近くなったことより、先生と近くなったのです。これは病気ですよ。統一教会病。(笑い) 神と近くなろうとしたのに、結局は誰と近くなったの？ 先生と近くなったのです。ですから「天国は我が心にある。天国は我が環境になければならない」というのです。天国は天上にできるのではなく、地に成さねばならないのです。環境天国を成さなかったら、天上天国は現れないのです。

ですから人間を好きになる人間は、神がきらう人間です、そうでしょう？ 「好ましい人間です」好ましい人間だということです。皆さんは人間がとても好きですか？

統一教会は、普通の人がどんなに研究しても分からないのです。我々だけが知って、どのように知っているの？ 我々は体恤していますから…。そんな何かがあるのです。その体恤したことを、先生と皆さんの間の体恤として残すだけでなく、世界化しなさいというのです。これが可能なら地上天国ができる。このように考えます。これは縦的な体恤ですので、横的化せよ！ 横的ということは四方世界です。東西南北ですので、民族を超越していった韓国人のみならず、世界万民の前に四方性によって体恤化せよ！ そうすれば天国ができるのです。そのように生きる人間は天国に行ける資格を持った人間です。これが公式です。それで食口という言葉を使うのです、食口。この食口という言葉はとても気分がいい言葉です。引っくり返して口食になってはいけませんが。(笑い)

靈的指導者はこんな体恤的な何かがなかったら仕事ができないのです。本を抱えて説教の準備をして、天の…その本の中に神がいますか？ そうではありません。神の心霊の中に現れるので、心霊を通さずしてはならないことを、皆さんは知らねばなりません。

飛躍的、革命的な靈的世界の発展を成している統一教会

体恤的信仰はとても尊いものです。それで統一教会に入る食口ならばほとんどが体恤しているのです。必ず体恤するのです。皆さんの現実的生活圏内でみな起こるのです。心からみ旨のために誠精をつくせば、天が共にいて下さるのです。

例をあげると、日本の食口たちが人參茶を売るんですが、責任量を与えてどれだけ売るかということ、人參茶が神の代身の役目をするところがあるのです。「あ！ 先生が人參茶

を・・・」こんなことが起こるのです。自分が懸命に売れば、先生が霊的に人参茶を売ってくれるのです。そんな境地に入ってくるのです。今、現実的に自分が人参茶を売り歩いています、見れば先生が後についてくるのです。どこの家庭でも、入れば家ごとに売れるのです。そんな事が起こるのですよ。これは不思議でしょう？ そんな事が可能なのです。ある時に皆さんが、昔、食べることも着ることもできずに苦勞した先生を考えれば、涙が溢れ、ごはんを食べることも忘れ、眠ることも忘れて狂ったようになっていると、先生が背広を着て、颯爽と現れて慰めてくれる、そんなこと起こるのです。これまで宗教で体恤できず、10年誠精をつくさなければ体恤できなかった事を、統一教会では瞬間的に体恤が可能なのです。これが飛躍的にどうなるか？ 革命的な霊的世界の発展を成す統一教会であると、私はみるのです。皆さん、体恤しましたか？ 体恤したことがありますか、ありませんか？ 「あります」あるの？ 「ハイ」皆なければなりません。

この体恤したことを実践しなければなりません。ですから先生のために、先生を好きになるのと同様に、兄弟のために、兄弟を好きになるのです。そうすればその人は間違いなく天国に行きます。ですから先生を中心として、皆さんが体恤的な一つのモデルを持っているという事実は大変なことです。その驚くべき体恤を、今の現実的、実践舞台に適用させるのです。

現実的舞台で体恤が可能だということは宗教世界の偉大な革命

次に神の心情について、考えてみましょう。神の心情がどこにあるかというとき、祈祷の中に声を聞いてみれば「先生の話、よく聞け。先生を悲しませてはいけない。先生を喜ばせよ」というのです。それ以外にないのです。そのように教えて下さるのです。そして先生に会いたくて眠ることもできずにいるので、霊界が開かれるのです。最も早いのがこれです。霊界が開かれるというのです。先生がアメリカで何をされているのか、座っていて分かるのです。そんな事が起こるのです。

これは漠然とした信仰の主体的対象を、現実的、実体的主体として、横的舞台上において体恤することのできる圏を形成したということです。このような事実は、宗教世界に偉大な革命を提示したということです。体恤がなければダメなのです。

それで今日は体恤がどれほど、必要であるかについてお話するのです。体恤するためには必ず祈祷しなければなりません。誠精をつくさなければなりません。ここに現れる啓示や夢示を絶対に無視しないで下さい。これらを調整して、現実的生活圏内で、実践舞台でどのように適用させるかということが、信仰生活において極めて重要であるのです。先生自身もそうなのです。

個人の体恤を世界化する時、個体が問題

「さあ、時が来ました。実体的3年路程を行かねばならない」今から3年が重要です。大韓民国もこの3年路程にかかっています。共産主義と民主主義も今、3年路程の限界線を越えねばならない時に入りました。キリスト教と統一教会もこの3年路程の限界線を越えなければならない時に入りました。潮が満ちて、また引いて行くでしょう？ それと同じく、出ていったものが入って来る交差する時が来たのです。こんな世界思潮の時代をどのように知るか？ 公式は同じなのです。

個人の事情は家庭に反映され、その次にはこのように高まって行くのです。(板書されながら)これは同じ円形です。このように発展するのです。結局これは何か？ 大きくなるのです。広がるのです。この形は同じです。結局、個人の体恤は、家庭の体恤として現れ、家庭の体恤は氏族の体恤として現れなければならないのです。これは大きくなるばかりです。民族天国は国家天国、国家天国は世界天国にと、このように発展して行かなければなりません。この公式は変わりようがないのです。

問題はどこにありますか？ この基点がどこかといえば、自分です。私。皆さん個人だということです。個体が問題です。私自体が神を中心として…。この道が全て90度、全部90度です。この一点は同じなのです。全て私個人が中心なのです。

そういう意味で「宇宙を得るよりも、自分個人の命を得ることが価値ることだ」というみ言は、こんな観点からなされたま言です。自分が狂えば、世の中全てが間違ってしまうのです。

ですから批判ということは、自分が正しい立場の批判ではないのです。神でなければ、真の判定は下せません。そう見ます。ところでキリスト教では、統一教会に対して正しい判定をしてもらいたい。この者たち、判定が間違ったら、私が最後の判定を下します。そういう時が来たのです。問題は自分です。

それでは自分自体に、これが起こるのですか？ 違います。天があるなら、統一教会の先生を通して、皆さんと関係を結ぶ時は一対一なのです。そうでしょう？ これが自分自身だけで、縮小された自分個人のみで終結させるためではなく、拡大して全体を代表してやるということを、皆さんは知らねばなりません。このような公式をいつも適用するのです。自分が喜べば相対も喜ぶのです。

説教する時もそうです。必ず自分が恵みを受け、涙を流したその体恤的事実をもって説教すれば、その場は恵みの海になるのです。事実がなく、体恤的な内容がなければどんなに叫んでも、その場は冷え冷えとしてしまいます。公式に合致していれば1から10まで全て合致しますが、公式に合わなければ全てが間違っバラバラになってしまいます。

統一教会は体恤と実践が合わさって恐ろしいところだ

それでは今日、統一教会を中心として、何を教えようというのでしょうか？ 統一教会活動を教えるのではありません。先生と皆さんとの関係を教えるのです。その内的関係を中心として、外的な関係に拡大するための、モデルを形成するのです。これが絶対視することのできる価値として確定できない限り、環境としての絶対的な相対圏を形成できないのです。ですからこれが教会生活において、もっとも尊いことです。

皆さん、1週間5時なら5時、先生のみ言を聞くために夜明けから起きて、何時間も前から眠りもやらず、疲れた体で電車に乗って来れば、電車の中で全て教えられるのです。「今日、先生はこんな話をされる」というのですよ。来てみればその話だったのです。

体恤と実践が一致するのです。これは偶然ではなく、必然的にこのように合致することを体験しますので、誰が否定できましょう？ その国が挙国的に反対して、大統領が全部抹殺すると宣布したとしても、それを否定できないのです。

統一教会に反対してうまくやった奴は、一人も見ません。私が見るに、統一教会はとても恐ろしいです。私がそれを知っています。統一教会は恐ろしい所だということを感じます。私がもしも怒って、歯を食いしばり、歯ぎしりして祈禱する日には、えらい事が起こるのです。そうでなくても心から「この野郎！ 悪党め！」といえはきっと何か、日もたたずに刃に倒れたりするのです。そんな事をととても多く見ました。統一教会は恐ろしい所です。私はそう思います。

ですから軽挙妄動するのではなく、自分の心のままに世の中で生活していたそんな習慣性で対してはいけないのが統一教会であることを、私がよく知っています。その代わり、先生は深刻な人間です。原理原則には一步も譲歩がないのです。国が反対しても、共産党が反対しても、民主主義が反対しても、民主世界が反対しても、一步も譲歩しないのです。反対すれば反対するほど、ねじを巻くのです。反対せよ、反対すれば私はさらにやるのだ。おまえとわたしを比較して、おまえが悪かった時には……。そっちがバカよ、という言葉があるでしょう？ そっちが残れなければ、後退するのです。ナットとボルトが合わさって刻むので、ボルトが回らなければ、同じことです。ですから私が動くだす日には、反対したとしてもねじ込んでゆくのです。

では統一教会では実際どのように動いているか？ 先生と皆さんが感じるその心情的なものが核心となって、相対的世界に運用しなければならないのです。先生自身はどうするのですか？ 神と先生と、その感じることを皆さんに運用しなければなりません。同じことす。それで先生が知っていることは、皆さんが知らないのです。であれば先生に対して感じたことを、皆さんのこととして知るのです。

皆さん自体において、信仰世界の心の門を開き、心の畑を啓発することを今までやってきたのです。これが啓発されて、それで終わるのではなく、これを相対世界に適用させてこそ成るのです。

体恤と実践は二つの世界を調整するために絶対に必要

皆さんが霊的に体恤しましたか？ 先生を通して体恤しましたか？「ハイ」その体恤したことは、実践舞台に適用させなくてはなりません。そうすればここに必ず天国ができます。神を中心としてみると、自分が二番目なら、実践環境は三番目です。蘇生、長成完成です。私がまん中の立場に立っていますので、私が天と完成することができ、世の中も完成させることができる、こんな話になるのです。

ですから聖書を見ても、いつも二番目が問題になるのです。この二番目の立場はどんな立場か？ 天地万物の中で、神と宇宙をおいて見る時、人間は二番目の立場です。人間は一つの線を中心として見れば、3点を連結しているのです。この地点が人間です。ですから人間が完成することによって、神の完成を見るのです。人間の完成を春として、宇宙の完成を見るのです。

このような自分がいま、開拓する途上において絶対に必要なことが、この二つの世界を調整するための体恤と実践であります。体恤が霊的は面をいうならば、実践は真理面をいい、体恤が右側なら実践は左側です。これが一致する平行線を描いて、自分の人格基準の前に完結させることによって、宇宙を代表した一人の息子として登場することを、皆さんが知って下さるよう願います。